

博物館プレ90周年リレー展 「馬市でにぎわったまち～釧路・大楽毛地区～」

戸田 恭司*

2026(令和8)年に釧路市立博物館は創立90周年を迎えることから、各学芸員が担当分野でテーマを設定してミニ展示を実施している。歴史担当として、2026年の干支「午」にちなんで、馬と関わり深い市内大楽毛(おたのしけ)地区の歴史を振り返る機会を提供した。

大楽毛地区はJR釧路駅から9キロあまり西に位置する。大楽毛という地名はアイヌ語地名のオタ・ノシケ(砂浜の・中央)に由来するといわれている。現在、JR大楽毛駅や製紙工場、水産加工工場のほか、小・中学校、工業高等専門学校などの施設があり、大半は住宅地となっている。

明治以降、北海道の開拓に馬は欠かせない存在となっていた。一方で、日清・日露の両戦争を通して軍馬の重要性が増して、その生産が急がれた。大楽毛の西の白糠に1901(明治34)年、軍馬補充部釧路支部の設置、1906(同39)年に釧路産牛馬組合の設置、そして1911(同44)年には大楽毛家畜市場の開設があり、以後馬と大楽毛の関わりが大きくなっていった。

市場では毎年8・10・11月の年3回、のべ15日間の定期市が開かれ、臨時市もあった。三本木(現青森県十和田市)、盛岡とともに日本三大市場に数えられたといわれ、馬市が開かれた際には各地から人々が集まって大楽毛はにぎわったという。

釧路における馬産に尽力したのが^{じん}神八三郎である。青森県出身の神が釧路に移住後、馬の品種改良と馬産振興の体制づくりに60年あまりも携わった。日本人が使いやすい体格の馬づくりを目指して、海外から導入した馬を在来馬に交配、改良を重ねて日本釧路種の誕生につながった。ここで売買された馬は軍馬、農耕馬として各地に運ばれた。

1945(昭和20)年7月、釧路市が空襲を受けた際には大楽毛駅周辺が被災したほか、馬も犠牲になっている。その後、昭和30年代には交通網の整備と農業の機械化が進行して、馬が担ってきた役割が減少の一途をたどっていった。一方で、1959(昭和34)年に王子製紙(現・王子マテリア)釧路工場の操業開始により、周辺の市街地化が進んでいった。

このような流れを端的にまとめて関係資料の展示で紹介した。概要は次のとおりである。

1. 展 示 名 博物館プレ90周年リレー展「馬市でにぎわったまち～釧路・大楽毛地区～」
2. 期 間 2025年12月27日～2026年2月22日

* 釧路市立博物館

3. 展示資料

① 関寒山筆絵画

群れで駆けてゆく馬たちの姿を水墨画のようなタッチで描いた作品。関は釧路農業協同組合連合会に勤務していた。



② 日本釧路種像

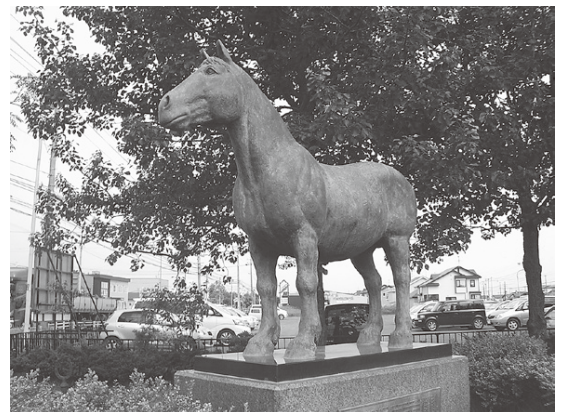
木彫で、付随するキャプションに「天覧品 田島高保氏作品」とある。

③ 書籍「釧路特産鞍馬」

1932(昭和7)年撮影の牝馬23頭をカタログ的に紹介。

④ 神八三郎翁像(写真パネル)

馬市の跡地に建立。神の功績が碑文に刻まれている。



⑤ 日本釧路種馬像(写真パネル)

JR大楽毛駅前に建立。像の由来の中に果たした役割が紹介されている。

⑥ 鳥取競馬場(写真パネル)

大楽毛ではないが、1932(昭和7)年に開場。現在の駒場町はその跡地である。

馬と関わってきた歩みは、釧路のまちの歴史を語る大きな要素の一つであると感じている。この展示であらためてこの歩みを知っていただけたのなら幸いである。